

イスラム教と私達の生活

前ジェッダ日本人学校 教諭

山梨県大月市立鳥沢小学校 教諭 依田 拓也

キーワード：イスラム教, サウジアラビア, ジェッダ, 異文化, 戒律, 暮らし

1. はじめに

世界で2番目に多くの信者をもつといわれるイスラム教。その聖地「マッカ」「マディナ」は、私が2009年4月から2012年3月まで赴任していたサウジアラビア ジェッダ市からそう遠くない場所にある。サウジアラビアに住む人達はほとんどが敬虔なイスラム教徒。イスラム教を信仰する国の中でもその戒律は厳しく、私達外国人もその戒律を守らなければならない。イスラム教が私達の生活にどの程度密接に関わっていたか、実体験をもとにその概略を紹介したい。

2. 信仰行為と私達の生活

イスラム教の聖典はコーラン。唯一神アッラーの啓示を受け、イスラム教を広めた預言者ムハَمَّد。彼が語った内容が編集され書物になったものがコーランである。イスラム教徒はムスリムと呼ばれ、彼らにとってのコーランは神の言葉そのものとして、社会生活のすべてを律する最も重要な行動の指針となっている。その中に、①礼拝(サラール) ②断食(ラマダン) ③巡礼(ハッジ)などの信仰行為が記されている。

(1) 礼拝(サラール)

ムスリムは、聖地「マッカ」に向かって1日5回一定の方法に従って祈る。ジェッダ市にはモスクと呼ばれる礼拝堂が点在し、アザーン(イスラム教徒への礼拝への呼びかけ)が大音量で流れる礼拝前後にはその周辺は大渋滞。学校や病院、省庁などの公共施設はもちろん、ショッピングモールや市場でも礼拝の時間になると、授業や仕事を一旦止め、お祈りに専念する。もし礼拝中に営業しているものなら、ムタワという宗教警察に捕まり処罰を受けることになる。

赴任時、この礼拝に驚かされるが多々あった。下にいくつか紹介する。

- ・朝一番最初のアザーンは夜明け前に始まる。日の出が早い夏場は朝の4時台。私の住居の近くにモスクがあったため、そのアザーン也大音量。目覚ましよりも早く流れるその音に驚き飛び起きる毎日であった。
- ・スーパーマーケットでは礼拝になるとシャッターが下り、場所によっては買物中であっても外に出されることがあるので、時計を見ながら、また礼拝の時間を気にしながら、常に行動する必要がある。買物と言えば、広々としたそのステージを家族3人で走り回った記憶が鮮明に思い出される。買物を楽しむためには、イシャー(1日で最後の礼拝)の後にゆっくりといきたいところである。ちなみに、ジェッダのスーパーやショッピングモールは夜の11時~12時ぐらいまでは営業している。
- ・アザーンが流れると、礼拝前にお清めをする人達でトイレが大混雑する。たくさんの水を使うため、トイレに水たまりができる。服や靴が濡れないよう注意する必要がある。女性は外出する時に、アバヤという全身を覆う黒いマントのような服を着なければならないので、トイレ時には男性以上に苦勞すると思う。

ムスリムの児童生徒がいる学校では、礼拝の場所と時間の確保を義務付けられている。ジェッダ日本人学校(以下日本人学校と略す)では、当時、ムスリムの在籍を認めていなかったため、日本の学校と同様のカリキュラムを進めることができたが、今後児童生徒数減の問題を克服するために、ムスリムも在籍可ということになると時間割

や教育課程の編成等難しくなってくると思う。日本人学校にもムスリムの現地職員がいるが、礼拝の時間を確保できるよう勤務形態等工夫していた。

各礼拝の時間は、その場所の日の入りと日の出の時間によって決まるため、場所や季節によって細かく変化する。現在ではアザーンを知らせる時計が販売されたり、インターネットで検索したりすることもできる。

<参考>

名称	時間帯	ジェッダでは (11/2010)
ファジュール	夜明け前	5:15
ドホル	昼 (夜明けから日が中没するまで)	12:09
アスル	午後 (影が自分の身長と同じになるまで)	15:19
マグレブ	日没	17:42
イシャー	夜	19:12

(2) 断食 (ラマダン)

ラマダンとはヒジュラ暦第9月のことをさし、この約一カ月の間の日の出から日没前まで一切の食べ物、水やタバコも含め断たなければいけない (ちなみに、イスラム教では豚肉アルコールの飲食は禁止されている)。日が沈んでいる間に食いだめするため、夜食は豪華なものになる。日没時に、車に乗っていると、ドイツ※1と水が入った袋を配っている人に出会う。ナショナルリティにかかわらず万人に配ってくれる。これは日中断食しているため、日没後、最初の食事 (イフタル※2と呼ばれる) の前に胃の準備運動といった意味合いで配っているようだ。

断食は飲食物の摂取量を減らすことが目的ではなく、身体を制御し、欲望をコントロールする、または、自分が得ている恵みがどれだけありがたいものかを再確認し、貧しい人や困っている人を助けようとする同朋精神を育てるところにある。

ラマダン中は午前中開店している店舗はスーパーのみ、午後は休み、夕方以降開店といった様子で買い物は非常にしづらくなる。イスラム教を信仰している国の中には、飲食店内がムスリムとそれ以外に分かれていて、断食をする時間でも飲食が可能な国もあるそうだが、サウジアラビアではそういったことは一切なく、私たちが家から一歩外に出れば、車内の見えるところにペットボトルを置かないといったところまで断食に対する配慮が求められる、注意が必要である。

※1 デイツ (ナツメヤシ) の木

中東の木と言えば誰もが「ドイツの木」と答える。ドイツの木とは「ナツメヤシ」のことである。

ナツメヤシの種類は100種類以上あり、高さも10～25メートルほどの差がある。四方八方に大きく葉を伸ばすナツメヤシが育つことで強烈な日をさえぎり、水の蒸発を減らすことができる。

ナツメヤシの実是最初緑で固い。それが赤くなり、次第に黒ずんでくると熟してくる。この実を房からはずし、ばらばらにして干すとドライフルーツになる。ドライフルーツは栄養価が高く、長く持つので遊牧民にとってはこれと家畜さえあれば、砂漠で当分生活できるそうだ。ヒトコブラクダの鞍もナツメヤシの木で作る。また、中東では子どもが生まれるとナツメヤシを植える。5年で実をならせ始め、一本の木から一年間に80kg



日除けがわりに駐車場にもナツメヤシの葉が使われている。

の実が取れる。木を切り倒せば建築材となる。皮をはげばかごを編むことができる。雨の降らないところなら大きな葉を屋根に葺く事もできる。このように、ナツメヤシはサウジアラビアの人々の生活に密着した植物と言える。

※ 2 イフタール

日の入り後初めての食事はデイツや水などで胃をゆるやかに活動させてから始める。その食事のことをイフタールという。レストランなどではbuffetをしていたりして大変賑わっている。その中に必ずある料理が“カブサ”で、もてなし料理である。

サウジアラビアの代表的な料理。ご飯を松の実やレーズン、サフランを入れて炊くか炒めるかして、調理した肉（牛・鶏・羊など）をのせる。羊が一番のご馳走とされる



サウジアラビア料理 “カブサ”

(3) 巡礼 (ハッジ)

イスラム教の聖地「マッカ」へ巡礼すること。ヒジュラ歴12番目の月の8日から10日くらいまでの期間、メッカ周辺で行われる諸儀礼。特にその月以外の小巡礼（ウムラ）と区別するために大巡礼とも呼ばれ、ムスリムたちにとっては憧れる喜びの旅である。ムスリムが「マッカ」に滞在する際、男性は巡礼用服（白いバスタオルを全身に巻いたようなもの）の着用が義務付けられており、神の前では皆平等ということを示す。女性は全身を覆う衣服で、顔だけが出るようにすればよいことになっている。大巡礼を終了したものは、社会的な立場を獲得するという意味ではないが、尊称を受け、その社会で尊敬される。

大巡礼のために毎年数百万人の人がジェッダを経由して「マッカ」に訪れる。ハッジ専用の空港もあるが、その時期は特に空港は大混雑する。ちなみに私が赴任した4月、大巡礼時期では無かったが、巡礼をする人達で混み合い、入国手続きが終わるまでに2～3時間近くかかってしまった。

3. イスラム教と女性

イスラム教と女性というテーマはイスラム教が始まった当初より議論されているもののひとつである。

コーランでは、初期の記述では男性と女性が平等であるという記述が多く見られていたが、時を追うごとに男性よりも女性は劣っているという記述も見られるようになり、男性の女性支配が確立されていったとされている。

イスラム教諸国、特に、サウジアラビアでは女性の行動はかなり制限されていて、車の運転も許されていない。仕事をしている女性もほとんどいない。外出する際は「アバヤ」と呼ばれる全身が隠れるような黒いマントのようなものを着用し、「ヒジャブ」と呼ばれるスカーフのようなもので髪を隠す。また、口元やおでこなどもすっぽりと隠し、目だけがでるような「ニカーブ」を身に付けたり、手の肌が出ないように手袋をしたりする女性もいる。これは、ムハマンドが、女性は女性らしいところ（その肌や髪など）を家族などの近親者にしか見せないように、と言ったことに由来する。レストランやフードコートなどの飲食店ではファミリー（女性）用の場所、男性用の場所と分かれていて、男性のみでファミリー用に入ることは絶対に出来ないようになっている。

日本人学校の現地職員の娘が結婚することとなり、自宅での婚前パーティに招待された。家族以外の男女は別にいなくてはならないというイスラム教の戒律により女性のみの招待であった。女性しかいない当日の空間ではアバヤを着ている必要はなく、イブニングドレスや華やかな衣装、色鮮やかなスーツで祝の席を華やかにしていたそう

だ。また、ムスリムの中には音楽を嫌う人が多いと聞かすが、この日は驚くほど賑やかなアラビック音楽が流れていたということである。

戒律の厳しさに女性はどう思っているのだろうか。実際に生活をする中で、また婚前パーティなどの話を聞いたりする中で、女性はもっと自由に御洒落をしたり、社会や文化に進出したりしたいのではないだろうか。もちろん、そのような考え方をしている人達も多く、実際に赴任して3年間で店頭立つ女性も少しずつ増えたとし、アバヤも黒一色ではなく、装飾を伴ったお洒落アバヤの数が激増した。しかし、戒律があったからこそ今のサウジアラビアの発展がある訳で、その戒律を守ろうとしている人達が多くいることも事実である。先日のニュースで、ロンドンオリンピックに初めてサウジアラビアから女性が出場するという記事を目にした。今後、今の発展をもたらしたその戒律、そしてサウジアラビアがどのように変わっていくか注視していきたいと思う。

4. 終わりに

日本ではイスラム教は決して一般的なものではない。しかし、現在7万人程度の信者がいるとされており、日本国内でも、名古屋、東京、神戸にはモスクがある。

アメリカで起きた同時多発テロ以来、イスラム教徒というだけで偏見の目で見られたりして、社会生活に支障をきたしている者もいるだろう。前述したように、日本ではイスラム教徒が少なく、彼らと接する機会も少ないため、誤解や偏見が生まれたとしてもそれを払拭する機会も少ないというのが現状であり、問題だと感じる。

サウジアラビアで実際に生活してきて、肌で感じることは、こちらの人々はとて日本人に好意的であるということだ。これは、イスラム教と、日本人の考え方が似かよっている所が多く（両親への敬意、家族重視、社会的相互扶助の精神など）親近感が湧くということに由来する。また、近年日本への注目は更に高まっており、特に日本の学校、その掃除、授業などがサウジアラビアのテレビで取り上げられ、大きい反響を呼んだこともその理由の一つだろう。

サウジアラビアでは、ファストフード店で食事をした時に出るゴミや、自分で持っていたゴミをゴミ箱に入れるという習慣が徹底されておらず、その行為は一つの仕事とされている。また、ソファーや椅子に子ども達は当然のように靴のまま上がる。彼らにとってはそれが習慣であり、文化なのである。住んでいる私たちが日本にいたときには当たり前にしてきたことが、現状に甘んじている現実を突きつけられたようでドキとしたことが何度もあった。現地の文化を認め、郷に入っては郷に従うことから異文化コミュニケーションは始まると思う。しかし、私たち日本人が良いと思う、自国の習慣や文化を、現地に馴染むように実践し、認め合うことも異文化コミュニケーションの一つではないかと考えた一場面であった。

私はある日、フードコートで一人の少女に出会った。彼女は現地校に通う10代の少女。とても日本が好きだという。「私は〇〇です」と自己紹介を日本語ですることができ、日本で聞かれるような「やだー」「本当ー」という言葉もスラスラ出てくる。驚くことに彼女は日本語を学校で勉強しているわけではなく、インターネットや、サウジアラビアのテレビで放送されている日本の漫画（彼女はアニメと呼んでいた）から独学で習得したとのこと。また、学校の同級生も日本が大好きだそうで、漫画、日本語の認知度は高く、お箸も使えるとか。

「日本はとてもきれいなところなんですよ。いつか絶対行ってみたいです。」

彼女は目をキラキラさせながら日本語でこう言った。

日本に住んでいると、未知の世界を感じるサウジアラビア。しかし、暮らしているのは同じ人間であり、この地球を共有する仲間である。この機会にその仲間のことを少しでも知ることができたのは貴重な経験であった。次はそれを伝える番である。「知らない」ことから始まる偏見や、無理解を少しでも解けるよう、この経験を活かし、子ども達にも伝えたい。